

み ず

神戸大学経済経営研究所
教授 山地 秀俊

50歳を過ぎてから、戦後まもなくの1950年代の幼年・少年時代の情景・人物を夢で時々見るようになった。特定の情景や人物を系統立てて見るというのではなく、とりとめもない相互に脈絡のないものである。

もっとも鮮明に出てくるのがお遍路さん。特に春になると、菜の花の黄色と麦の緑そしてお遍路さんの白装束の対照が無性に懐かしい。しかし我々讃岐の子供は、お遍路さんを「遍土」(へんど)と呼び恐れていた。暗くなるまで外で遊んでいると母親から「遍土に連れて行かれる」と叱られたからである。今思うと、昔はお遍路さんになる人は必ずしも求道者的な人ばかりではなかったからであろう。続いて思い出されるのが「木割りのWさん」である。真冬でも赤い褌一つで日本一という幟を立てた荷車を引き、鉞(まさかり)を1本積んで闊歩していた。注文を受けると各家々まで出向き薪用の木を割って生計を立てていた。筋肉隆々としており彼が通るたびに近所の母親が騒ぎ、結構人気があったように覚えている。「白粉(おしろい)おばさん」も思い出す。物貰いであったが派手な化粧をして着物姿で定期的に近所を回ってきていた。少しませた同い年の友人(ひろっきちゃん)が、「おばさんというが、本当は男かもしれない」と言っていたのを覚えている。魚屋の「Mさん」。「魚いらんのナー、パ」という売り声であった。最後に「パ」という余分な声が入るのが特徴で、「Mさん」が来たということがすぐ分かった。彼は、さばいた魚の臍物をすするのが得意であった。母親たちが「イヤー」と顔を背けるとよけい得意そうにすすっていた。「Oの豆腐屋さん」。夏も冬も豆腐を自転車の荷台に積んだ木箱に入れて売り歩いていた。木箱の下に卑猥な写真を隠し持ち、男の子が頼むと少しだけ見せてくれていた。名前は知らないが、「爆弾キャンディ売り」のおっさんも。氷水を入れたひょうたん形をしたゴム風船を売っていた。だいが大きくなって夏の「爆弾キャンディ売り」のおっさんは、冬の「焼き芋屋」のおっさんと同一人物であることを知った。このことを子供時代に経験していたので、「ドーナツ屋」と「雑巾屋」が一緒であっても驚かなかった。私は、ひろっきちゃん、わたーさん、それにやんさん、おんち達とこうした人物の後を追いついて遊んでいた。

悪戯鬼どもが「かくれんぼ」や「缶けり」をするときのことを思い出す。今の子供らのように同学年の友人だけと遊ぶというのではない。下は幼稚園にも通っていないいわゆる「弟分」から、上は中学生あたりまでが参加していたように思う。さらに「SのSさん」「TのMちゃん」ら、障害のある子も参加していた。これだけ年齢等の分散が大きい集団がよく一つの遊びをしていたものだと感心する。大げさに言えば、そこに工夫があった。

「みず」という制度である。幼稚園にも行っていないような「弟分」や「障害のある子」は、ゲームの中で「みず」という身分になる。「缶けり」の場合、「みず」は鬼にはならない。しかし身を隠して鬼の隙を見て缶をけり、見つかったものを再度助ける（ゲームをリセットする）権利はもっているという身分である。われわれも最初は「みず」でゲームに入れてもらって、大きくなって一人前のプレーヤーになる。したがって「みず」も手を抜くことはなく、鬼も必死で「みず」を探す。「みず」が混じっていてもゲームそのものには何ら影響はなく、楽しめるのである。年齢差のある子供たちがコミュニティを作って遊ぼうとしないといわれ始めて久しい。この影響が学校やひいては企業の組織作りにまで響いているといわれる。このようなことを耳にすると、1950年代の、讃岐の悪餓鬼どもは、「みず」という、文化人類学的に世界に誇れる「制度」を作っていたといえるかもしれない。しかしなぜ「みず」というのかは知らない。「水」なのかもしれないが、定かではない。友人が「見ず」ではないかと教えてくれた。ひとつの深い見識であろう。

50歳を過ぎて人生を省みるとき、もしどこかの時代に後戻りさせてやるといわれたら、やはり、ひろっきちゃん、わたーさん、やんさん、おんち達と興味ある人物の後を追いつけ回っていた時代に戻りたい。